



健康長寿医療センターのヒポクラテスの木について

ヒポクラテス(紀元前 460 年頃～紀元前 370 年頃)は、古代ギリシャの医者である。医学を原始的な迷信や呪術から切り離し、臨床と観察を重んじる経験科学へと発展させたことが最も重要な功績として挙げられる。また、医師の倫理性と客観性について『誓い』と題した文章が全集に収められ、現在でも『ヒポクラテスの誓い』として受け継がれている。これらヒポクラテスの功績は古代ローマの医学者ガレノスを経て後の西洋医学に大きな影響を与えたことから、ヒポクラテスは「医学の父」、「医聖」などと呼ばれる。

そのヒポクラテスは、晩年、生まれ故郷のコス島のプラタナスの木陰で、若い医師達に医の道を教えたといわれる。そのゆかりのプラタナスの子孫が巨樹となって、19世紀のヨーロッパで最も有名な木となり、「ヒポクラテスの木」とよばれていた。今日、空洞の多い老樹となっているが、その葉(ひこばえ)2本が大きく育っており、親の老樹をしのぐ勢いで繁茂している。

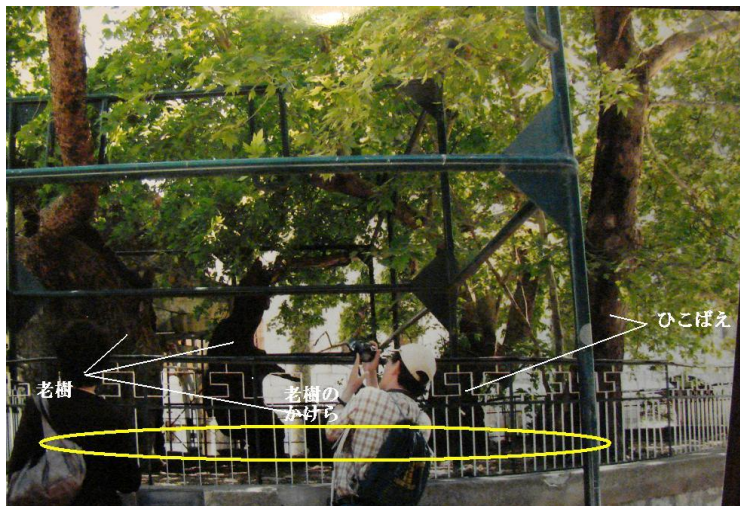
この「ヒポクラテスの木」を始めて日本に持ち込んだのは、慶応大学卒業の産婦人科医篠田秀男先生である。1955年にコス島を訪れた際、その種を持ち帰り、日本で発芽させ、その実生苗や挿木苗をご自分の病院や母校の慶応大学、山形県の施設などに植えたのである。

1966年、元日本医史学会理事長の新潟大学の整形外科医、蒲原宏先生が、同様にプラタナスの種を持ち帰り、発芽させ、あちこちに挿し木苗を配布している。

1970年、東大の沖中重雄先生は、医学会総会の会頭であったとき、東大紛争後の医学界の混乱を深く案

じ、ヒポクラテス展を催した。これを担当した東大の緒方富雄先生は、そのとき以来、ヒポクラテスに深く思いを致し、篠田株、蒲原株を入手して育てていたが、1976年、ギリシャの Doxidas 教授経由で、「ヒポクラテスの木」ゆかりの苗を入手、本郷の東大医学図書館の前に植え、説明碑を建てている。今日、38年を経て、医学図書館の前に巨樹となって育っている。篠田株も本郷の敷地内のベルツ・スクリバ銅像の近くに植えたが、2000年頃には枯死して、説明碑のみが残されている。蒲原株は沖中先生が長く療養されていた虎ノ門病院の川崎分院で育てられ、今日、医師教育のシンボルとなっていたが、2013年に虫害で枯死した。

1977年、日本赤十字百周年にあたり、小林隆院長は、ギリシャ赤十字から苗と種を入手、日赤中央病院で増殖し、赤十字病院を中心に広く配布している。その後も何人かの先生がコス島を訪れるたびに苗木を入手し、医学教育のシンボルとして育てている。



2005年、ギリシャ・コス島にて、著者撮影

最盛期、黄色輪の樹幹であったが、巨大な空洞ができ、樹皮でろうじて立ち、鉄枠で支えられている。2本の葉(ひこばえ)が大きく育つ。



東大医学図書館前の、樹齢30年余のヒポクラテスの木。遠くに新校舎の塔が望みできるが、医学のシンボルの医神・アスクレピオンの杖が描かれている。

日本の“ヒポクラテスの木“						2010. 4. 10.			
	篠田	蒲原	緒方	小林	ギリシャ協会	原田	武田	大田・富樫	不明
記載	42	35	1	119	22	5	5	8	2
生存	17	20	1	43	13	2	3	7	2
踏	2	5	1	11	2				
アソ	5	12		23	9		1	7	
ネット	10	2		6	2	2	2		2
枯死	15	10		20	5	3	1	1	
不明	10	5		56	4		1		

2010年4月以後、ネット上に、蒲原株22本程度、武田株3本程度の記載あるが、詳細不明

ごとの本数を一覧表に示した。その後、長岡の星先生、虎ノ門病院の先生が積極的に配布している。この調査のとき、それを導入するときの関係者の医学の現状、教育についての深い思いが伝わってきた。

私も2009年に、縁あって日本ギリシャ協会から苗を入手し、育成に努めたが、心無い人？に傷つけられ、数年で枯死してしまいました。

今回、新施設の建設に際して、再チャレンジを試みた。たまたま本郷の東大・緒方株の実生苗を見つけ、関係者のご理解を得て、2012年秋に高さ30cm位の苗を入手、リハビリテーションのスタッフに鉢植えにして育ててもらっていた。新施設移転後は、屋上庭園に移植していたが、樹勢もしっかりし、屋上の屋根を貫く勢いになってきたので、地上に降ろすことにした。移植に最適の4月、病院玄関に移植した。背丈158cm、根回り3cmの若い樹である。ヒポクラテスの有名な箴言の緒方訳を掘り込んだステンレス板を配置した。

また、板橋看護専門学校の新築にあわせ、表の武田株のヒポクラテスの木の苗を入手することができ、新しい敷地に植えた。武田株(京都の武田病院の理事長が入手、配布したものの挿し木苗を旧知の三重大学の名誉教授からいただいたものである。

「ヒポクラテスの木」は中東原産のプラタナスであり、アメリカ原産のアメリカプラタナス、交雑種のモミジバプラタナスとは葉の形、幹の様子、実のつき方などの表現形に違いがあるが、詳細は稿を改めたい。

この10年近く、あちこちの施設の「ヒポクラテスの木」を見る機会を得た。それぞれ、若干の違いがあり、実生の場合の遺伝子変異、枝変わり、植えられた土地の条件、樹齢などに起因すると思われた。医学倫理も、時と場所を乗り越えて、本質的には普遍的なものであろうが、時代ごとに、土地ごとにいささかの差があり、それを反映するものと考えたい。

プラタナスの寿命はおよそ500年と考えられており、現在のコス島の老樹も、すでに5代目くらいなのであろうか。すでに老年期に達しているが、勢いよく葉(ひこばえ)が二本、次の時代に向かって育っている。医の道に思い惑うこと、悩み苦しむことは、医学に携わるものの必然である。そのときに、自然とともにある医学の本質を、考え続けるきっかけにしていればと思っている。あちこちの医療関連機関で「ヒポクラテスの木」を育てる人たちの共通の思いであろう。(稲松孝思)

2005年ころ、ある思いがあって、アンケート調査、ネット情報の収集により、日本国内のヒポクラテスゆかりの木について調査をした。日本国内で100本以上のヒポクラテスの木が育てられていることが判明し、それらの木の由来と系統を日本医史学会に報告した。その後の調査情報も含めて、入手者の系統



2012年秋入手 2014年4月定植

Vita brevis, ars vero longa;
sed occasio momentosa,
empirica periclitatio periculosa,
indicum difficile.

ヒポクラテスの木
生命はみじかい
技術はながい
機会は去りやすい
経験はだまされやすい
判断はむずかしい
—ヒポクラテスの箴言より—
緒方 富雄 訳

ヒポクラテスの箴言